

仙台市文化財調査報告書第48集

史跡遠見塚古墳

昭和57年度環境整備予備調査概報

昭和58年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第48集

史 跡 遠 見 塚 古 墳

昭和57年度環境整備予備調査概報

昭和58年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序

史跡遠見塚古墳の環境整備に伴う予備調査も、昭和50年度に第1次調査を行なって以来、今回の調査で第6次調査になります。第5次調査までは、周辺調査を主として古墳の平面形を確認してきましたが、今回は最終調査ということで、上体部を中心とした調査を行ないました。

当古墳は、現在まで確認されているところでは東北地方第3位の規模をもつ前方後円墳であり、内外から調査結果を注目されておりましたが、以下報告のとおりの状況がありました。後日、第1次から第6次までの調査結果を総合した正式報告書を刊行する予定であります。

ところで前述したとおり、これらの調査は環境整備の資料を得る目的で行なわれたものであり、第1次調査以来、随時、整備工事も行なってまいりましたが、最終調査を終了した今年度以降、墳丘の復元整備に着手していく予定であります。

昭和43年11月8日に史跡に指定されて以来、土地の公有化がなされ、以米15年もの歳月が流れ、当古墳の環境整備による史跡公園化は、地元住民はもとより、仙台68万市民の長年の願望と期待であり、当市としましても、早く史跡公園として市民に活用していただきたいと努力しているものであります。また遠見塚古墳は、古墳そのものの保存、整備、公園化というのみならず、広く、仙台地方の5世紀を象徴するものであり、その時代背景を古墳という姿に凝縮しているものと言えます。

このような、郷土の歴史をしるす貴重な文化遺産の保存、保護に対し、今後とも皆々様方の一層の御協力を賜わりますことを御願い申し上げますとともに、この概報が広く諸学兄の研究に御活用いただければ幸いに存じます。

昭和58年3月

仙台市教育委員会

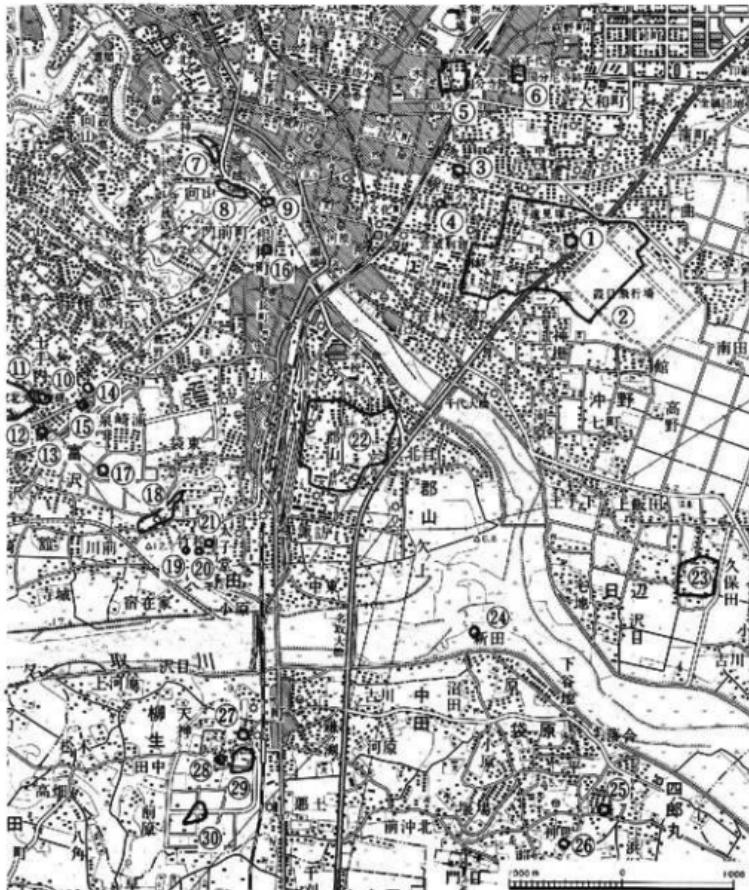
教育長 藤井 繁

例　　言

1. 本書は国庫補助事業（総額8,000,000円）の環境整備工事に伴う調査概報である。
2. この報告は、昭和50・51・53・54・55年度に統く第六次の発掘調査概報である。
3. 本書は、調査の経過・調査概要の記載に重点をおき、考察は若干である。
4. 調査に当っては、東北学院大学教授伊東信雄氏（東北大学名誉教授）・宮城県教育庁文化財保護課課長氏家和典氏の御指導をいただいた。
5. 本報告書中の土色は「新版標準土色帳」（小山・佐原：1970）に基いているが、本文中ににおいては、灰黄褐色から灰白色のシルト・粘土については、他層との対比による印象によって、白色シルト・粘土と呼んでいる。
6. 地形図は、建設省国土地理院発行の5万分の1「仙台」を使用した。
7. 本書でいう北は、特にことわりのない場合は真北を基準としている。
8. 本文の執筆は結城（I、II、III 2～5、IV、VI）、工藤（III1・V）が担当し、編集も両名で行なった。遺物の整理・実測は調査参加者全員で行なった。
9. 本調査は、昭和57年10月に着手し、昭和58年3月31日で全ての事業を終了した。

本　文　目　次

I. はじめに.....	2	4. 東西両櫓間の礫石群.....	19
II. 古墳の位置と環境.....	8	5. 墓域埋土について.....	20
III. 主体部の構造.....	8	IV. 前方部の調査.....	21
1. 東 櫓.....	9	V. 出土遺物.....	22
2. 西 櫓.....	15	VI. まとめと考察.....	27
3. 排水施設.....	18	引用・参考文献.....	30
		写真図版.....	32



第1図 仙台市中南部の古墳時代中心の遺跡分布図

- | | | |
|-------------------|------------------------|---------------------|
| 1. 遠見塚古墳 | 11. 三神峯遺跡(小円墳二基含む) | 21. 王ノ塚古墳 |
| 2. 南小糸遺跡(集落) | 12. 富沢墓跡(筑輪墓一基含む) | 22. 郡山遺跡(官衙) |
| 3. 法師塚古墳(円墳・横穴石室) | 13. 真町古墳(前方後円墳) | 23. 今泉遺跡(集落) |
| 4. 猫塚古墳(小円墳) | 14. 砂押古墳(円墳) | 24. 大塚山古墳(円墳) |
| 5. 陸奥国分寺 | 15. 金洗沢古墳(円墳) | 25. 城丸古墳(円墳) |
| 6. 陸奥国分尼寺 | 16. 魁塚古墳(前方後円墳) | 26. 弓天選古墳(円墳) |
| 7. 爱宕山横穴群 | 17. 教塚古墳(円墳) | 27. 伊豆櫻古墳(円墳) |
| 8. 大年寺横穴群 | 18. 六反田遺跡(円墳1、石室1、木棺1) | 28. 安久源訪古墳(円墳・横穴石室) |
| 9. 宗禅寺横穴群 | 19. 春日社古墳(円墳) | 29. 安久東遺跡(方形周溝墓1基) |
| 10. 上手内横穴群 | 20. 鳥居塚古墳(円墳) | 30. 栄遺跡(集落) |

I. はじめに

遠見塚古墳は幕政時代、「封内名顕志」、「封内風土記」によれば「遠望塚」、「遠眺塚」と呼ばれており、古戦場とか、物見台として理解されていた。

また、仙台平野の真にある前方後円墳としても早くから注目されており、考古学雑誌第8巻には笠井新也氏が「奥羽地方に於ける原史時代遺跡の概観」の中で紹介しており、歩測による古墳の全長を約50間としている。

昭和50年度からはじまつた遠見塚古墳の環境整備にともなう事前調査は、50、51、53、54、55年度に引き続き、今年度の調査が第6次調査に当る。今回は事前調査の最終年に当り、文化庁や宮城県文化財保護課などと協議の上、主体部に主力を置いた調査をすることになった。また、前方部にも追葬、副葬施設が設置されている可能性があるので、現況中心軸に沿ってトレッチを設定した。

主体部については、昭和24年、進駐軍の霞ノ目飛行場拡張の際、当古墳後円部約3分の2が土取り削平され、その時、東北大学教授であった伊東信雄氏と、同大学々生であった小林清治氏が困難な状況の中で立会って、若干の記録を残している。その内容は、昭和25年『宮城県文化財調査報告書第1集』と、昭和29年『日本考古学年報（昭和24年度）』に紹介されているので、以下その記載内容をまとめて紹介することで当時の状況を把握しておきたい。

●古墳の長さは110m、幅は西側に一段低くなった場所があるので、どこまでを測るかが問題であるが、段を加えると後円部70m、前方部43m、段を加えない後円部57m、前方部30mであって、おそらく東北地方でもっとも大きな古墳ではないかと思われる。高さは後円部で6m、前方部で2.5mで、段丘の大きさにたいして高さが低く、ことに前方部には高まりが少なく、ほとんどの平坦といってよいくらいであるのが、この古墳の外形上の特徴である。古墳は南面している。段は2段あるが、埴輪ではなく、周囲が田圃で、一段低くなっている所をみると、昔は堀があったらしい。

●本古墳の内部構造は、後円部の中央地下約2mの所に、約2mの間隔をおき、中軸線に平行に、2個の、両端の上った長さ5~6mの舟形の粘土壇を作り、その中に死体をおさめた木棺を入れ、その上を粘土でおおったものであることが明らかになった。

●西側の粘土壇の上から出た1個の土師器は、おそらく葬るときに埋めたものと思われるが、ロクロを使わない素焼の壺で、これは古墳の前方にある竪穴の中から出る土師器と、同一種類のものである。

●本古墳の造営年代は、群馬県あたりに多い、粘土壇を有し、石製模造品を出す前方後円墳と同じ頃とみられ、群馬県船橋山古墳とも近いものがあると思われる。このように平行する2つ

の粘土椁を後円部に有する前方後円墳が、前方後円墳の中でも古い型式であることは、近年梅原博士等の指摘されるところで、後藤先生も稻荷山古墳の年代を5世紀としておられるが、本古墳も、古墳前期に属するものであることは疑いなく、このように古い型式の古墳が、宮城県あたりにまで発見されることは、注目すべきことである。

その後、昭和51年には、仙台市教育委員会が主体となって、周辺調査と同時に切断された後円部断面を検出することによって、粘土椁の残存状況及び墓室の東西軸を確認する調査を行なっている。その当時の所見は以下のとおりである。

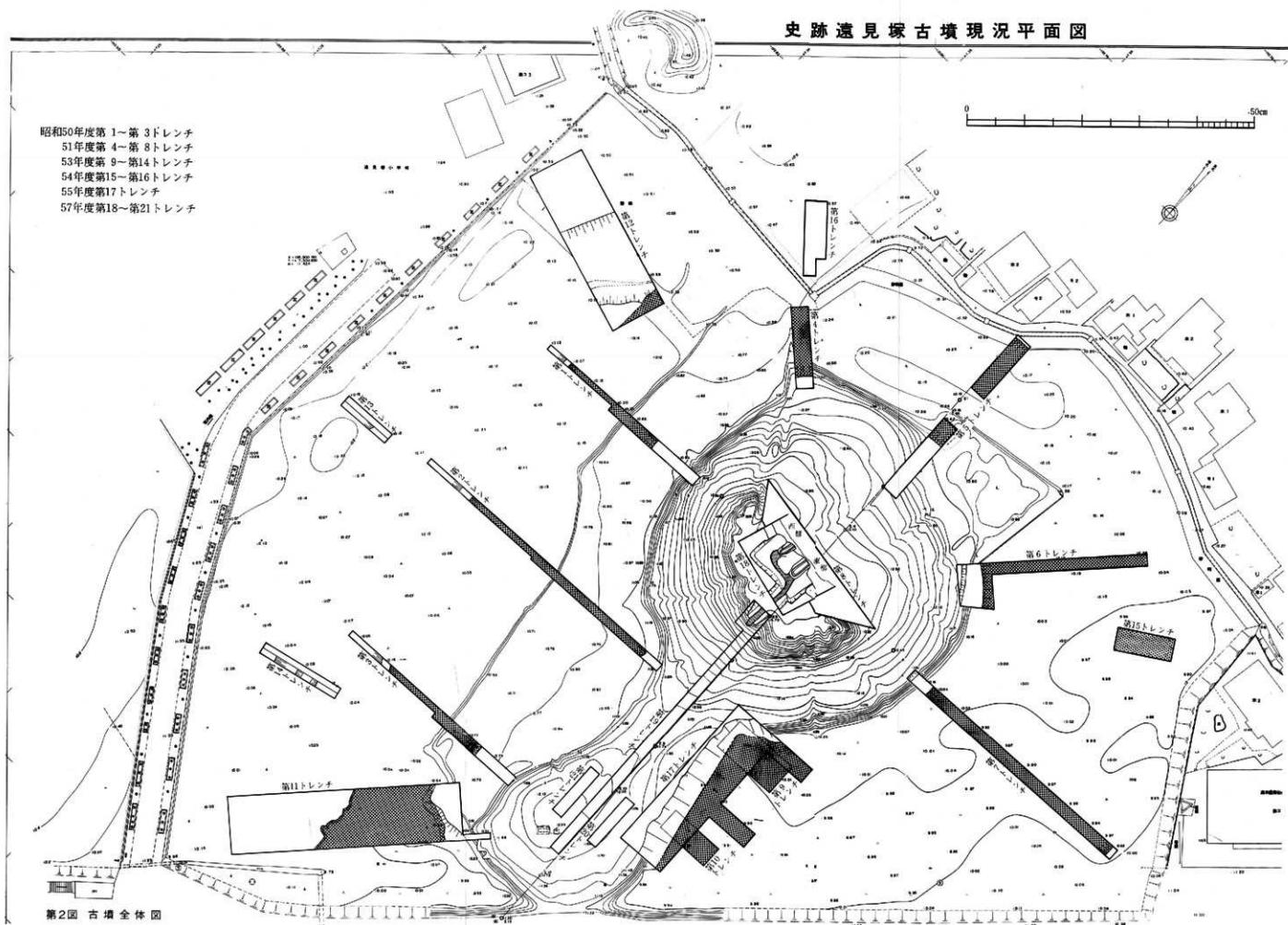
●近世以降の盗掘痕などが粘土床直上付近まで及んでいたが、全般的に粘土椁自体の保存は良好であった。粘土椁は東西に2基、軸線方向に平行に並んで確認された。2つの粘土椁は墳頂から掘りこまれた幅11m、深さ1.2mの墓室の底面に粘土床を貼りつけたような状態で作られた。粘土床の厚さは10cmほどで粘土床の下に特に関連する施設は見られなかった。粘土床の間には河原石(朱塗りのものを含む)を敷き並べた部分があった。その構造的な面では西日本の例などと比較すれば、基本的には特に異質な面は見られず、むしろ同様な構造をとっているが、例えば粘土床の下に排水用と見られる礫をつめるといった入念さは見られないようである。

以上のような主体部に関する資料をもとに、主体部の構造、古墳の造営年代を把握するため、昭和57年10月4日から、第6次調査を以下の要領のとおり実施した。

調査要項

1. 透跡名 遠見塚古墳(C-001)
2. 所在地 仙台市遠見塚・丁目23-10外
3. 調査期間 昭和57年10月4日～12月10日
4. 調査主体 仙台市教育委員会
5. 調査担当 仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係 結城慎一、工藤哲司
6. 調査指導 仙台市文化財保護委員、東北学院大学教授 伊東信雄
宮城県教育庁文化財保護課長 氏家和典
7. 調査参加者
- 補助員 森剛男、鄭聰
- 作業員 小林広美、赤間郁子、神尾恵美子、神尾紀以子、菊地雅之、相沢尚子、渡辺紀雄、村山恭平、石川次郎
8. 調査協力 仙台市立遠見塚小学校、株式会社丸重大友工務店

史跡遠見塚古墳現況平面図



第2図 古墳全体図

B-B'			
層	土 命	上 面	下 面
1	10 Y 500-10 Y 500	地表	10 Y 500-10 Y 500
2	10 Y 500-10 Y 500	砂質土	10 Y 500-10 Y 500
3	10 Y 500-10 Y 500	砂質土	10 Y 500-10 Y 500
4	10 Y 500-10 Y 500	砂質土	10 Y 500-10 Y 500
5	10 Y 500-10 Y 500	砂質土	10 Y 500-10 Y 500
6	10 Y 500-10 Y 500	砂質土	10 Y 500-10 Y 500
7	10 Y 500-10 Y 500	砂質土	10 Y 500-10 Y 500
8	10 Y 500-10 Y 500	砂質土	10 Y 500-10 Y 500
9	10 Y 500-10 Y 500	砂質土	10 Y 500-10 Y 500
10	10 Y 500-10 Y 500	砂質土	10 Y 500-10 Y 500
11	10 Y 500-10 Y 500	砂質土	10 Y 500-10 Y 500
12	10 Y 500-10 Y 500	砂質土	10 Y 500-10 Y 500
13	10 Y 500-10 Y 500	砂質土	10 Y 500-10 Y 500
14	10 Y 500-10 Y 500	砂質土	10 Y 500-10 Y 500
15	10 Y 500-10 Y 500	砂質土	10 Y 500-10 Y 500
16	10 Y 500-10 Y 500	砂質土	10 Y 500-10 Y 500
17	10 Y 500-10 Y 500	砂質土	10 Y 500-10 Y 500
18	10 Y 500-10 Y 500	砂質土	10 Y 500-10 Y 500
19	10 Y 500-10 Y 500	砂質土	10 Y 500-10 Y 500
20	10 Y 500-10 Y 500	砂質土	10 Y 500-10 Y 500

粘土被覆土層
粘土被覆シルト層
堅地シルト層
礫層



第3回 18トレンチ・19トレンチ
北端部実測図

II. 古墳の位置と環境

遠見塚古墳を含む南小泉地区一帯は、仙台平野を形成している深沼層、霞ノ日層、福田町層、岩切層のうち霞ノ日層に当たる。霞ノ日層は現世につづく氾濫原で、内陸部の最上部を占めている。この層は土器、石器、植物種子を含む鰐層砂岩、ローム層からなっていて、霞ノ日飛行場周辺に典型的に発達している。(註)

仙台市において古墳文化のはじまりは、方形周溝墓が発見された、中田地区の安久東遺跡周辺と考えられるが、やがて弥生時代以来の大集落として発達していた南小泉地区に、市内最大で最大の遠見塚古墳が造営された。その後、古墳造営の中心は長町、富沢地区に移り、埴輪を有する前方後円墳、円墳が多く見られる。以後、小円墳が市内各所に散在するようになり、横穴群も土手内、向山地区、燕沢地区、岩切地区に造営されていったようである。

遠見塚古墳は、仙台駅の東南約3.7kmの遠見塚一丁目地内にあり、広瀬川北岸に発達した標高10m前後の自然堤防上にある。古墳周辺は、弥生時代から平安時代にわたる南小泉遺跡と呼ばれる大集落跡であり、ここから出土した古墳時代の土器の一部は南小泉式と呼ばれ、県内の5世紀頃の標準土器となっている。また当古墳の北方約1.5kmのところには陸奥国分寺、同尼寺跡があり、当古墳を含む南小泉一帯にも、条里造構が残り、平安時代の住居跡が発見されてきている。

このように歴史的に重要な位置を占めるこの地区も、住宅化が進み、わずかに川畠を残すのみとなってきた。

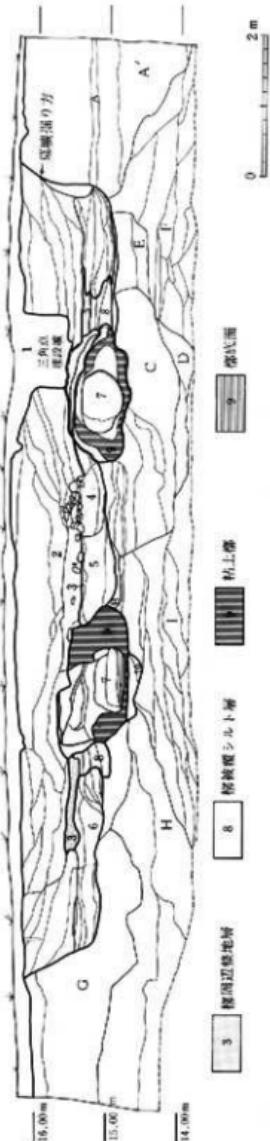
(註) 奥津春生 「大仙台閣の地盤、地下水」 昭和18年参照

III. 主体部の構造

墳頂部に15×10mの第18トレンチを設定し、表土を排除した結果、現地表下約35cmで墓壙掘り方を確認することができた。確認した墓壙線は、現状中軸線から見て約11度東にふれており、復元中軸線からも約9度東にふれている。また位置的にも墳頂中心部より若干西へ偏したところに位置している。墓壙線の確認にあたって、どうしても、その南東側が東南角までつながらず、溝状に前方部の方へ張り出しており、検討した結果、その溝状の部分と墓壙内にあたる部分の埋土に基本的な違いがなく、ほぼ同一と判断されたので、墓壙を掘る際に、その東南付近に溝状の施設も同時に掘削していたものと判断された。

墓壙内の構査の進行にともない、墓壙内には東西2基の粘土壙と、その中に河原石群、また両桟南端基底部には、西側から東側をとおり、先に確認していた溝状構造をとおり、第19トレンチ第1グリットにぬける排水溝が設置されていたことがわかった。

次にそれらの詳細についてふれることにする。



第4図 18トレーナー見通し断面図（北より）

No.	土 色	地 質	上 質	中 質	下 質	地 盤
1	10Y R 5/6の黒褐色	砂質土	砂質土を含む	砂質土を含む	砂質土を含む	(石・土)
2	黒褐色～暗褐色	砂質シルト	同色の砂を含む黒褐色のシルト質が砂質のシルトを含む			
3	10Y R 5/6に近い黒褐色	シルト	所産地シルトを細粒と共に含む	上層に灰白色を含む地盤を多く含む		
4	10Y R 5/6に近い黒褐色～10Y R 5/4に近い黒褐色	シルト～軟塑質シルト	黒褐色シルトを少部分含む	（未記載）		
5	10Y R 5/6～10Y R 5/4に近い黒褐色	シルト～軟塑質シルト	黒褐色シルトを少部分含む	（未記載）		
6	褐黃褐色～淡黃褐色	シルト～軟塑質シルト	黒褐色土を多く含む地盤を含む	（未記載）		
7	10Y R 5/6に近い黒褐色～10Y R 5/6の黒褐色	シルト～粘土	上層に2～3cmの黒褐色を含む地盤を含む	（未記載）		
8	10Y R 5/6に近い黒褐色	シルト	（未記載）	（未記載）		
9	10Y R 5/6～10Y R 5/6の黒褐色	砂質土	（未記載）	（未記載）		(標準)
10	10Y R 5/6に近い黒褐色～10Y R 5/6の黒褐色	粘土質シルト～シルト	（未記載）	（未記載）		(標準) (方塊)
A	10Y R 5/6～10Y R 5/6に近い黒褐色	シルト	（未記載）	（未記載）		
A'	10Y R 5/6の黒	シルト	（未記載）	（未記載）		
B	10Y R 5/6の黒褐色	シルト～軟塑質シルト	（未記載）	（未記載）		
C	黒褐色～深黒褐色	シルト～軟塑質シルト	（未記載）	（未記載）		
D	10Y R 5/6の黒褐色～10Y R 5/6に近い黒褐色	粘土質シルト～粘土	（未記載）	（未記載）		
E	10Y R 5/6に近い黒褐色	シルト	（未記載）	（未記載）		
F	褐黃褐色～淡黃褐色	シルト	（未記載）	（未記載）		
G	10Y R 5/6に近い黒褐色～10Y R 5/6の黒褐色	シルト～砂質シルト	（未記載）	（未記載）		
H	黒褐色～深黒褐色	シルト	（未記載）	（未記載）		
I	一時褐色～淡褐色	シルト	（未記載）	（未記載）		

1. 東 槵

〔位置と遺存状況〕 東榼は、墓壇の南北方向での三等分線のうち、東側の等分線上に榼の中軸線を合せるように位置する。墓壇の南壁上面から榼南壁外面までは約2.8m、墓壇東側上面から榼東壁外面までは約2.2mを計る。

東榼北側は土取りによって完全に削平されてい

るが、南側は柳南壁より計って、東壁上面で2.2m、西壁上面で1.7m、柳床面で3.9mまで後世の擾乱や盗掘を受けずに、良好な状況で保存されていた。木棺の腐朽により柳天井部は柳の床面まで落していったが、天井部の上面は横断面でみると下向きの緩い弧を呈していることから、天井部は構築当時と比較的変化の少ない状況で下落しているものと考えられる（第5図B-B'参照）。

木棺は腐朽し尽しているためにその痕跡は、柳床面・壁面の黒褐色土層として確認することしか出来なかつたが、東柳残存部中央付近の東西両壁下端部には、ほとんど上化した木片がわずかに残存していた。木棺が腐朽して出来たと考えられる黒褐色土層は、床面全体及び壁面下半部において確認され、その厚さは1mmから1cm程度であるが、床面で厚く、壁面で薄くなっている。

〔柳の形態と規模〕 柳の平面形は、柳北部が失なわれているために現状で判断せざるをえないが、その所見によると長方形を呈しており、東西両壁は内外面ともほぼ平行している。南壁は、外側がやや丸くなっているが、内面は直線的に東西両壁に接続する。柳の横断面形は、切斷調査を避けたため正確には不明であるが、北側削平面での見通し観察によればやや四角張った偏平な円形を呈しており、柳外側の底面及び両側壁面は脹みもわずかで、それぞれ水平及び垂直に近い断面を呈している。縦断面も切断していないが、柳南壁外側の調査によれば、柳の底面から天井部にかけては、やや内側に傾斜しているので、東柳外側を横から見ると長方形やU字形ではなく台形に近い形態を呈していたと推察される。なお、天井部については残存していないが、柳内に落下した部分の観察によると、横断・縦断とともに、緩いアーチ形であったと思われる。

柳の規模は、残存長4.0m、幅1.8m、柳床面よりの高さは粘土上端まで65cm、シルト上端まで90cmを計る。（柳床面よりの高さは+10cm程）粘土の厚さは、床部が10cm前後、東壁40cm・西壁45cm・南壁45cmを計る。

〔柳内堆積土〕 柳内堆積土は、柳天井部崩落土とその上の基礎埋土崩落土に大別される。第5図の断面図は、柳天井崩落部を図化したものである。天井崩落土上面は、棺を被っていた当時と同じような状況アーチ状を呈していた。柳天井崩落土の層厚は、平均40~45cmあり、白色粘土層と白色シルト層からなる。白色粘土層は、柳南壁内面より130~140cmの所までは層厚15cmの白色シルト層の下から床面に至るまで、層厚20~30cmの範囲に検出することができたが、それ以上柳南壁内面より離れた所からは粘土層を検出されず、白色シルトだけが厚く堆積していた。このことからすると、棺の天井部は全面的に粘土によって被われていたのではなく、棺の側面部分だけを粘土で被い、棺の中央部については白色シルトをもって被い、さらに全体を白色シルト層で被って柳を完成させていたと考えられる。最終段階で柳天井部を被ったシル

ト層は、かなりよくしまっており、外表面は酸化鉄を含んで硬化している。

〔木棺〕 木棺は先に述べたとおり完全に腐朽しているために、その形態の詳細については不明な点が多いが、粘土棺の状況によって外形をある程度復元することは可能である。それによると、平面形は長方形を呈し、棺床面より約35cmの高さで最大幅となる。横断面形は梢円形に近いが、底面部分はやや半らに仕上げられている。縦断面は、棺残存部北端から棺南壁の近くまではほぼ平出となっている。南辺の妻の部分の縦断面は、棺南壁より60cmの所から緩やかに棺が最大幅となる高さくらいまで立ち上がり、そこから約20cm程直立する。そこからはそのまま直立したものか、底部と対称的に内傾したかは不明である。棺床面からの傾斜面と木口の直立面との境界には角がつき、その境界線の中央はやや低くなっている。

木口部分は、底面及び側面・天井面から緩やかな曲線となるように面取りされて、蓋と身の合せ部分だけが直立する面となっていたと思われる。このような形状を呈する木棺は、割竹形木棺と考えられる。なお、櫛の調査によれば縫接突起や蓋と身の合せ口の段差は認められない。

各部の寸法は、底面幅約65cm・最大幅約115cm(底面より約35cmの高さ)を計る。残存長は底面で3.0m・南壁より3.35mを計る。

〔副葬品と出土状況〕 東櫛からは、棺内副葬品として豊富20点(内2点は微細片)・碧玉製管玉1点・ガラス製小玉4点が出土している。古墳及び櫛の規模からすると出土量は極めて少ない。出土位置は、東櫛南壁より165cmから215cmまでの約50cm間の床面上に集中する。出土層は、木棺腐蝕黒褐色土層中のものが大部分であるが、一部黒褐色土層直上層の最下部に含まれるものもあるが、レベル差は2cm以内である。各遺物の分布状況を見ると、玉類は東櫛中軸線のやや東側に分布し、特に遺物分布域の北東端に集っている。豊富は分布域全面に分散しており中軸線によって東西に分けた場合もそれぞれ9点ずつ(微細片を除く)出土している。

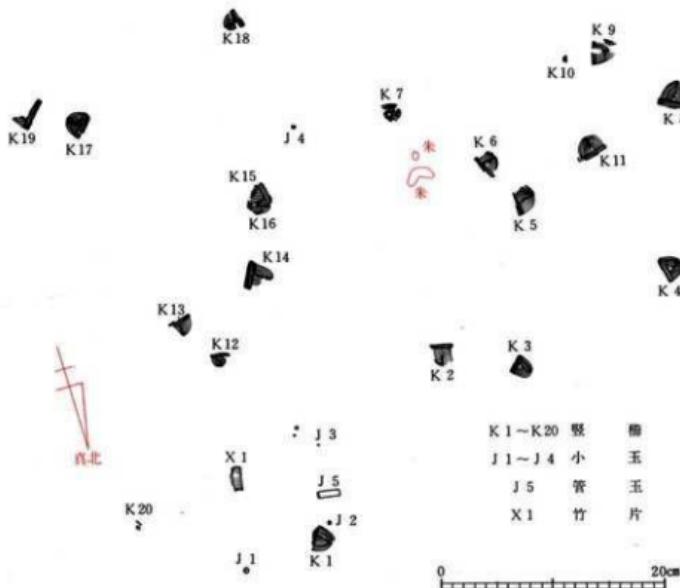
遺物の集中する部分の黒褐色土中には、わずかながら朱が散布していたが、その量は注意しないとわからない程度であった。面的な広がりをもって確認されたのは第6回に示した部分だけである。

〔櫛の構造と構築順序〕 東櫛(棺を含む)の構造は、棺を中心みると、①割竹形木棺・②木棺を被う粘土櫛(壁部で厚さ40~45cm・天井部で25cm)・③粘土櫛南辺に接続する排水施設④粘土櫛及び排水施設接続部を被覆する白色シルト層(壁部で厚さ30~50cm・天井部で約15cm)⑤櫛完成後の櫛周辺整地白色シルト層の5つに大別することができる。粘土櫛については、木棺を置く前に粘土床として施設された部分と、木棺を置いた後に木棺の周囲や上面に施設された部分に分けることができる(第5回参照)。なお④の白色シルト層は、東壁及び南壁断面では確認できるが、西壁側断面では確認できないので、この白色シルト層は東櫛南西角付近までの施設であって、櫛全体に巡るものではないようである。このことは西櫛についても同様で、



西壁から南壁には白色シルトが巡っているが、東壁には確認できず、東西両櫓間には別の白色系のシルトによって埋められている。

上記の構造をもとに、東櫓の構築順序を考えると、①墓壙南北3等分線東側線を南北の中心として、墓壙底面を浅いU字形に溝状に掘る。②掘った穴に粘土を貼り付け粘土床をつくる。（第5図朱線）③木棺を置く。④木棺を粘土で囲む。（天井部は端部付近だけが粘土で被われ中程には粘土がほとんどかけられていなかったと思われる。）⑤粘土櫓南壁外面下端に続いた溝に入れて排水溝に接続させる。⑥粘土櫓の周囲（西壁側を除く）を互層状に積み重ねた白色シルトで被う。この作業に際しては、白色シルトの外側も褐色土によって互層状に丁寧に叩き締めながら埋める。⑦粘土櫓の上端付近まで白色シルトを積んだところで、櫓及び棺の上面を白色シルトで被って固め、櫓を完成する。⑧東西両櫓間を白色系シルトで埋める。（埋める深さは東壁側の白色シルト積土と同じ高さまで。）⑨墓壙の壁際を大まかに埋める。⑩櫓周辺を数cm～十数cmの白色シルトによって整地する。（東櫓南方では一部に白色粘土も使用。）⑪墓壙全体を埋める。以上のように考えられる。



第6図 東塔遺物出土状況図

2. 西 横

〔位置と遺存状況〕 西横は墓壙西辺より約3.5m東側に主軸があり、その方向は磁北に対してN-23°30'—Eである。これは墓壙東西辺の方向がN-15°—Eなので、それとの開きも♀30'である。また真北に対するN-16°30'—Eとなる。

前述したが、北半分は土取りで削平されており、残存部も擾乱されており、そのピットが4ヶ所ほどあいている。しかし残存部の中心軸からは、幸い全部はずれている。

〔横の形態と規模〕 粘土横は崩落しており、残存している最頂部は南端部であり、標高約15.6m、墓壙底面からの高さは60cmである。また棺床は、木棺南端で約14.9m、残存部北端で14.8mを計る。

粘土横はその木棺の痕跡から剖竹形木棺と考えられ、その外側を白色粘土で巻き、更にその外側を白色シルトで巻いてある状況である。粘土横の大きさは、残存長3.5m、幅2.0mである。また木棺の残存長は約2.6m、幅約0.9mを計る。ただし、外側を取り巻く白色シルトは「排水施設」のところでもふれるが、排水溝の中に敷かれている礫石の上に位置している。

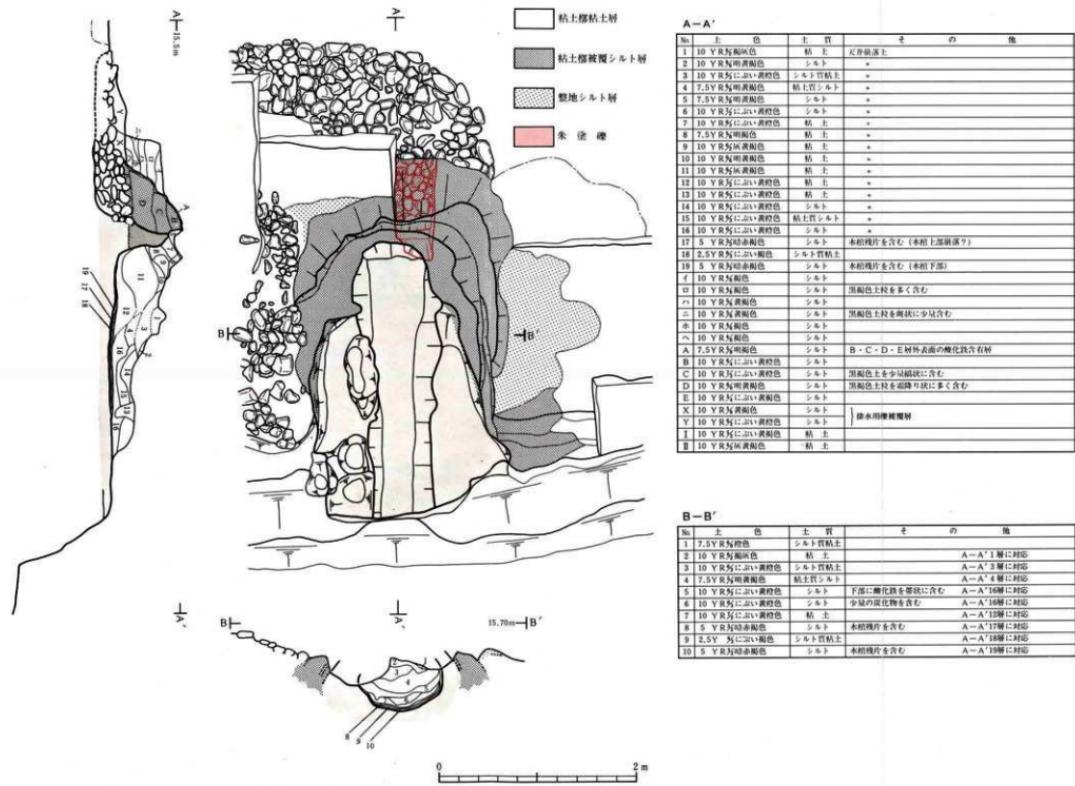
〔木棺〕 その木質は腐朽しており、黒褐色を呈している。木棺の身の部分と蓋の部分も底面ではほぼ一体となっているが、特に西側では、身部と蓋部の腐朽痕間に粘土が入り込んでいる。それから見ると、その幅は本米1.1mほどと考えられる。底部での木棺腐朽痕の厚さは1~2cmであり、残存部北端は擾乱されており、粘土床が黒く変化しているだけである。

〔西横の構造〕 まず墓壙底面を幅約1.5m、深さ約35cmで舟底形に掘りくぼめ、そこに白色粘土を敷いて棺床を造っている。粘土の厚さは、木棺直下では約3cm、木棺の左右下に当たる部分では10cm前後と計ることができる。木棺を据えたあと、その左右側辺に粘土をつめ込むように積んだと思われ、その厚さは約35cmと厚い。この状況は木棺の両側だけでなく、南端側も同様である。また天井部は、崩落土の観察により、1cmないし2cmの粘土が貼られていたと判断できる。また粘土床と両側、南端側をかためた粘土との縫合と思われる部分には、若干の黄色粘土が観察された。

ところで前述したが、棺床を造る際には排水施設も設置されており、横の外側を取り巻く白色シルトはその上に構築されている。その厚さは、両側と南端側の基底部では約50cmと厚く、序々に薄くなってきて、崩落土及び残存部分を検討してみると天井部で20cm弱である。

この西横は、かって進駐軍によって土取りされた際、切断をまぬがれた部分もだいぶ擾乱されており、崩落土も木棺南端付近で残っていたと言える状況であった。その状況から判断すると、はじめ横中央部が崩落し、南端部天井が序々に崩落したらしく、粘土横外側を取り巻く白色シルトが3段になって残存していた。

以上をまとめてみると、剖竹形木棺を据え置き、粘土を巻くというよりは、両側、両端に厚



第7図 西横実測図

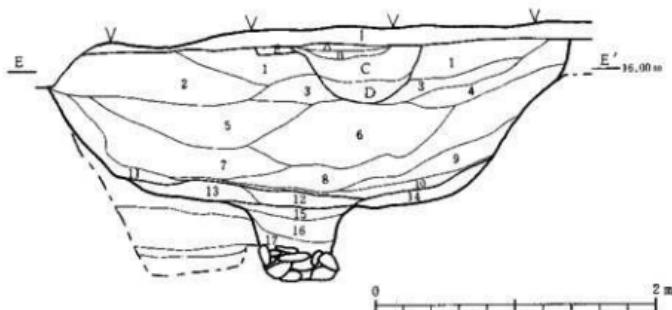
く粘土を積み重ね、木桿をがっちり固定したような状況と観察される。その外側を取り巻く白色シルトも、粘土と同様な積み上げ方をしている。また外側の白色シルトを積み上げながら、墓壇内も互層状に丁寧につき固めて埋めてきた状況である。

(出土遺物) 副葬品は発見されず、崩落した粘土及びシルトの中に黒曜石細片1点、土師器の細片が3点含まれていただけである。その土師器片は小片で、その上、非常にもろいものであり、器種・器形・型式は不明である。

3. 排水施設

排水溝は西槻西袖と東槻東袖南端を結ぶ約6mの長さの東西のものと、東槻南端から更に南に向きをかえ、約11m前方部の方へ傾けているものとが一連となっている。

排水溝は上幅で約70cm、下幅で約50cmであるが、両槻の南端に接続する部分は、両槻の幅と



No.	上位色	土質	その他の
1	10YR 8/4 黄褐色	シルト	灰白・黒褐色シルトを多量に含む
2	10YR 8/4 黄褐色	砂質シルト	少許? 黄む
3	10YR 8/4 黄褐色	砂質シルト	を多量に含む
4	10YR 8/4 黄褐色	砂質シルト	粒子が細い
5	10YR 8/4 黄褐色	砂質シルト	をより多く含み細い
6	10YR 8/4 黄褐色	シルト	を多量に含み細い
7	10YR 8/4 黄褐色	シルト	を含み、粒子が細い
8	10YR 8/4 に似る黄褐色	シルト	黒褐色シルトを若干含む
9	10YR 8/4 に似る黄褐色	シルト	* を含む
10	10YR 8/4 に似る黄褐色	砂質シルト	を若干含む
11	10YR 8/4 黄褐色	砂質シルト	あらざらしている
12	10YR 8/4 黄褐色	砂質シルト	黒褐色シルトを若干含む 黑白シルトをブロック状に含む
13	10YR 8/4 黄褐色	砂質シルト	を若干含む
14	10YR 8/4 に似る黄褐色	砂質シルト	* を含む 下はやや大粒
15	10YR 8/4 黄褐色	砂質シルト	* を若干含む 混合シルトを少し含む
16	10YR 8/4 黄褐色	砂質シルト	* を若干含む 13より細い
17	10YR 8/4 黄褐色	砂質シルト	* を若干含む 15, 16より細い
I	10YR 8/4 に似る黄褐色	砂質シルト	(耕作土)
A	10YR 8/4 に似る黄褐色	砂質シルト	灰白のシルトが少しうる
B	10YR 8/4 黄褐色	シルト	灰化鉄を若干含む
C	10YR 8/4 に似る黄褐色	砂質シルト	灰を多量に含む
D	10YR 8/4 に似る黄褐色	砂質シルト	Cよりやや暗く強黄褐色シルトをブロック状に若干含む
E	10YR 8/4 に似る黄褐色	砂質シルト	よりやや明るい

第8図 通路排水溝断面図

ほぼ一致しており、約1.8mある。東西両櫓南端に半円形に設置した排水施設を排水溝でつなぎ、更に南方にぬいしているということもできる。

溝底面レベルは、西櫓南端部で標高約14.7m、東櫓から前方部の方へ約5mの位置で標高約14.5m、東櫓から約11mで、残存している排水溝南端では標高約14.3mであり、若干ではあるが、西から東へ、更に南へ傾斜している。溝の深さは、それぞれ約20cm、50cm、70cmである。

この排水溝の中には、長径約10cmから30cmの礫石（河原石）が散かれているが、小石が使用されていないため、礫石間には空隙ができているところも多い。これらの礫石の最上部の標高は、西櫓南端では約14.9m、両櫓間では約14.8m、東櫓南端付近で約15m、東櫓から南へ約5mの位置で約14.8m、排水溝南端では約14.6mとなっている。これらの礫石は両櫓に対応する部分では梢側に序々に高くなっている、両方とも約15.1mの標高になっている。

これまで各レベルを見てきたが、礫石頂部のレベルが西より東が約10cm高くなっている、東より南が約40cm低くなっている。西より東側の礫石レベルが高くなっているのは、墓壙底面のレベルを反映しているためと考えられる。

また各レベルを見てもわかるように、東西方向の排水溝には、その上端まで礫石が散かれているが、東櫓から南へ伸びる排水溝は、その深さに対して、礫石の敷かれている厚さの比率は減少している。よって当排水溝は、南北方向の部分には黄褐色（砂質）シルトが溝上端部まで埋められている。もう少し正確に記述すれば、墓壙から南側にとび出す排水溝部分と言うことができる。墓壙内に当たる排水溝は、溝上端と礫石上部のレベル差があまりないことから、溝そのものの埋土ではなく、粘土構築時の白色シルトが礫石上にかぶっている状況である。

なお、東西両櫓に接続する部分の礫石上には、粘土構築面に敷いてある灰白色粘土が薄くかぶっているところが一部見られるので、この排水施設が設置されたのは、木棺を据える部分を舟底形に掘り下げた時点と、ほぼ同時点と見られる。

また、墓壙南方に伸びる排水溝は、上幅約3.8m、下幅約2.2m、深さ約1.2mの通路状造構の中央部に設置されており、暗渠排水施設の掘り方としての性格とともに、主体部構築作業用通路としての性格も、一時的に有していたと見られる。

4. 東西両櫓間の礫石群

東櫓西袖と西櫓東袖の間は約2.2m離れている。その箇所に長径約5cmから30cmの礫石（河原石）が多数存在し群をなしているが、それらの配置には規則性が認められない。ただし、その礫石群の南端は東西両櫓を結ぶ線上にはほぼ一致している。北端は戦後、進駐軍の土取りにより切断されているので、どの位置まで伸びていたかは不明である。

礫石群の最下部は、南端では、墓壙底面から丁寧な互層状に埋められている下部埋土の上面の薄い白色粘土の上になり、標高約15.4mである。残存する北端でも、互層上の埋土ではない

が、南端とほぼ同一レベルである。礫石群の最高位は標高約15.6mで、高低差約20cmの間に礫石が存在するのであるが、礫石が密集していると言うよりは、全体的に見れば黄褐色シルトと混在しているという状況である。

平面的に観察すれば、東側寄りに擾乱ピットが存在し、礫石群の一部が排除されている状況であるが、それを考慮しても西側側に片寄って群をなしている。

また、礫石群中には7個の赤く彩色された石があるが、位置的にも、レベル的にも規則性が認められない。

これらの礫石群は、西側の構築の途中に配石され、その後、東側の構築に移行したらしく、東側側から白色シルトがかぶってきている状況を呈している。

5. 墓壙埋土について

墓壙は南辺が約11m、西辺残長が約4.4m、東辺残長が約3.8mである。深さは西辺で約1.4m、東辺で約1.1mである。埋土は基本的には大きく上部と下部の2層としてとらえられるが、東西両櫓の構築手順の差異及び墓壙底面のレベル差、墓壙東南部に施設された通路状造構の影響によって、細部については、その埋り方、埋土に若干の相違が認められる。

・下部埋土

墓壙底面より、西側西側で約50cm、東側東側で約40cmの厚さの黄褐色シルトと黒褐色シルトの互層になっており、丁寧につきかためられている。埋土の厚さの違いは、墓壙底面の傾斜に起因し、下部埋土上面の標高は、両者とも約15.45mになっており、その面で水平になるよう埋められている。この埋土は、粘土構築過程において、その下部をささえる機能もあったようである。

このように互層状に埋土が見られるのは、西側の西及び南側、東側の東側においてであり、両櫓間及び東側南側はそのような状況ではない。両櫓間は「東西両櫓間の礫石群」でもふれているが、その西南端だけが互層状の埋土が見られ、それより北側は、褐色シルト及び白色シルトを埋め、互層状埋土上面と水平にしている。また東側南側は、東側の外側を構成する白色シルトで、互層状に、墓壙南端底面に向って傾めに埋められた状況を呈している。その後は通路状造構とともに埋められている。これは上部埋土と共通する部分である。

・上部埋土

下部埋土上面から墓壙上面まで、現状で厚さ約90cmの部分である。基本的には褐色シルトをいききに埋めもどしたという状況であるが、主体部構築過程と埋め戻し過程において、粘土構築に使用したと思われる白色粘土が東側南側と西側南側に埋土の一部として存在している。また「下部埋土」のところでもふれたが、東側南方墓壙外に施設された通路状造構も、墓壙上面を埋める際に同時に埋めているようで、東側南側墓壙埋土及び通路状造構の埋土の層が共通

している。これも基本的には褐色シルトであり、レベル的には下部から上部にわたるものであるが、埋め戻し工程としては上部埋土としてとらえられる。

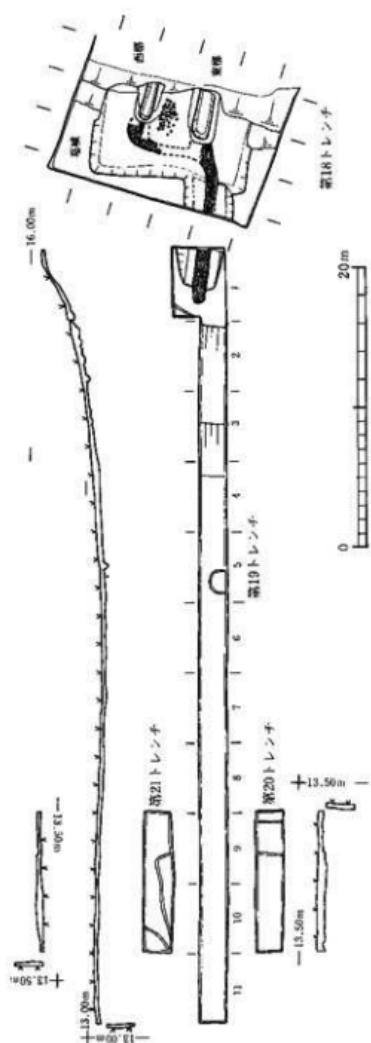


図9 図 18~21トレンチ配置図・断面図

IV. 前方部の調査

前方部に追葬及び副葬施設があるか確認するため、現況中心軸に沿って幅2m、長さ55mの19トレンチを設定、また、それに2m間隔をおいて、東側と西側に平行する2m×10mの20トレンチ及び21トレンチを設定した。19トレンチは5mごとに区切り、北から1グリット、2グリットと呼称することにして、11グリットまである。20トレンチ、21トレンチはそれぞれ19トレンチの9、10グリットに対応する。(図)

19トレンチは第1グリットの位置を後円部墳頂南端から設定しているため、墓壙東南部から前方部の方へ施設されている通路、排水構造が、この位置まで伸びる状況で検出された。この通路、排水構造は19トレンチ第1グリットの2m幅内では把握しきれなかったため、第1グリットの西側を2m拡張することによって全様を確認した。

前方部は19トレンチ第2グリットから第11グリット及び20、21トレンチにおいて耕作土等の搅乱土を排除することによって調査した。その結果、追葬、副葬施設は発見されなかった。また、耕作による搅乱ピット

は、第2グリットから5グリットに多く、特に第2、3グリットに集中している。ちょうどこの位置は、前方部と後円部の接点付近に当り、傾斜も、割合急である。第6グリットを中心とする付近が前方部で一番低くなっている。11.8m前後の標高を測る。第6グリットで低くなつた前方部は第7グリット中間付近から序々にレベルを上げ、第9、10グリットで最高となり12.2mの標高となる。それが第11グリット南端からレベルを下げていくようになる。

第19、21トレンチは耕作の深さは30~50cmであるが、第20トレンチは天地がえしが深く、30~70cmの深さになっている。

出土遺物は、ほとんどが弥生土器片であるが、特に第19トレンチ第9、10、11グリット、及び第20トレンチから多く出土している。

V. 出土遺物

1. 副葬品

副葬品としては、東櫛から出土した玉類と櫛がある。

①、管 玉

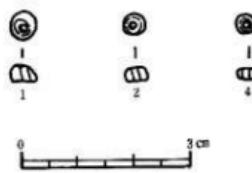
1点出だせし。いわゆる碧玉製のもので、濃緑色を呈す。長さ18mm・直径5mm・孔径2mmを計る。

②、小 玉

4点出土したが、1点は細片となって出土した(No.3)。全てガラス製で、No.1は直径5.5mm・孔径1.5mm・厚さ3mm、No.2は直径4mm・孔径1mm・厚さ2.5mm、No.4は直径3.5mm・孔径1mm・厚さ2mmを計る。色はNo.1・2がマリンブルー、No.3がエメラルドグリーン、No.4がコバルトブルーを呈する。

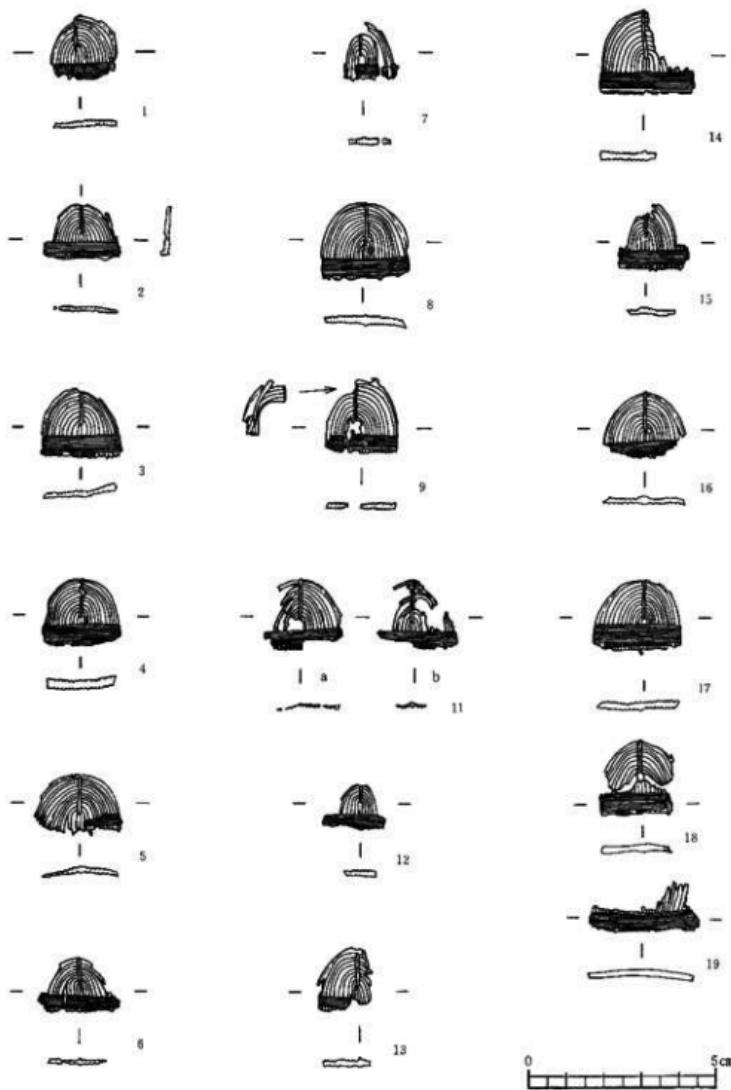
③、櫛

櫛は全て竹製黒漆塗りの堅櫛である。20点出土しているが、このうち2点は微細片で、他の櫛の破片の一部と考えられる(No.10は一本毎に分れた漆塗り竹部片4点・No.20は巻き糸束の破片)。歯は、漆が塗られていなかったためか残存しているものはなかった。また、漆塗布部についても竹材は完全に腐朽し、漆膜だけが残っている状態である。



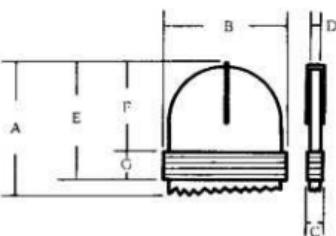
第10図 東櫛出土ガラス製小玉実測図

各櫛の大きさは第1表に示したとおりである。歯以外の形状のわかるもののなかで、最小のものはNo.3・4で、幅(糸巻き部)20.5mm・つまみ長17mmで、最大のものはNo.8の幅(糸巻き



第11図 東梯出土物実測図

部) 23.5mm・つまみ長19mmである。竹の幅は1.8~3.5mmのものまである。他の櫛もこの大きさの範囲内にあると考えられる。つくりも全てほぼ同様で、10本から13本くらいの細い竹の束の中央を糸で結束し、それを中央の竹が完全に二つ折りになるまで両端から湾曲させて、櫛歯の上部を幅3~5mmの幅で細糸によって固縛し、これに漆を塗布して作っている。なお糸巻き部の下端の片面には、No.2のように糸と平行する針状の凸出があり、これに巻き糸に直交、すなわち歯と平行方向に歯の幅と同じくらいの間隔で糸の巻かれた痕跡を認めることができる。



第1表 穫櫛計測表 (単位 mm)

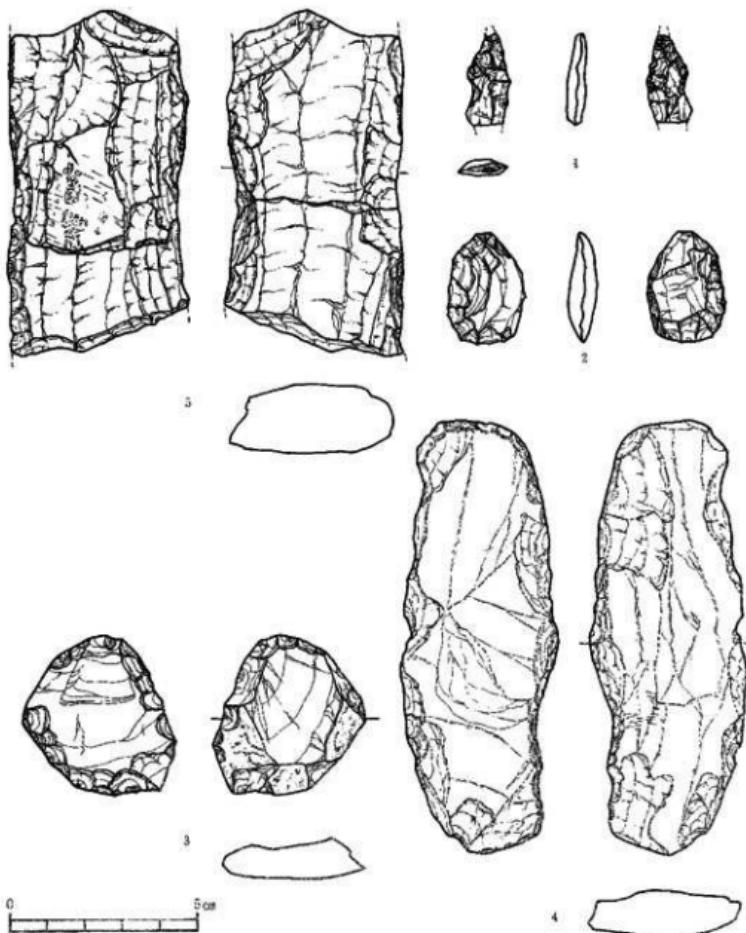
表No.	A	B	C	D	E	F	G	歯数	備考
	椎合部	幅(糸巻き部)	厚さ(糸巻き部)	厚さ(総米部)	つまみ長	結束部長	糸巻き幅		
1	17	(16)	2.2	1.5~2	16.5	1.5	3.5	2113上	
2	15	(20.5)	1.3	1	(13.7)	(10.5)	3.2	203上	
3	17.5	20.5	1.6~3.5	1.5	17.0	13	4	約20	
4	18	20.5	2.5~3.2	2.5	17.0	12~13	4.2	約20	
5	16.5	(22)	2	2	(13.8)	—	—	2413上	
6	14	(19.5)	1~2	1.5~7.5	(13.3)	10	3.3	1613上	
7	15	(19.5)	2~3	~1.8	(14)	(11)	(3)	161上	
8	20.5	23.5	2~2.5	1.5~2	19	15	4	約20	
9	19.5	(19)	2	1.5~1.8	(18)	15	3	2413上	
10	—	—	—	—	—	—	6	卷き糸片	
11a	—	—	—	—	—	—	—	22	糸片
11b	18.5	(21)	(—)	(—)	17.2	13.9	3.3	—	糸片
12	12	(17)	2~3	1.5~2.7	(2)	(8)	(4)	3211上	
13	17	(14)	2~2.3	1.8~2.5	(16)	(13)	(3)	約20	
14	22.5	(25)	2.5~3.5	2.3	23	16.5	4.5	24	
15	17.5	(17)	2~2.5	1	(16)	(13)	4	2113上	
16	17.5	(18)	2~3	1.5~2	17	12.3	3.7	22	
17	19.5	21.5	2~2.7	2~2.7	16.5	11.5	6	22	
18	(20)	(19)	1.5~2	1.5~2	(18)	13	5	203上	
19	12	(20)	1.8~2.5	1.5	(12)	(8)	4	?	
20	—	—	—	—	—	—	—	—	骨片

2. 表土及び墳丘出土遺物

表土及び墳丘出土遺物には、石器・弥生式土器・土師器・須恵器がある。須恵器は表土中からの出土であり、また墳丘出土遺物のはほとんどは墓域埋土中よりの出土遺物であるが、埋葬との直接的関係のないものである。本書では標記の遺物については、その代表的なものについて例示するに留め、詳細な報告については本報告書に譲ることにした。

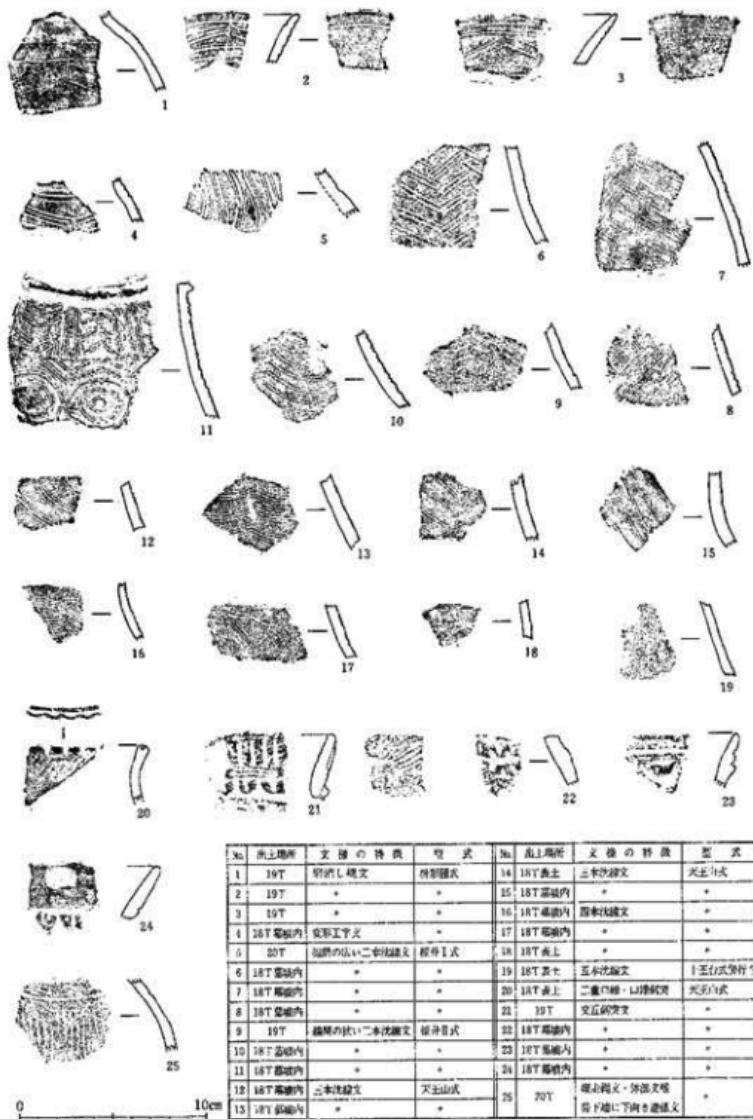
①. 石器

石器類はほとんどが剥片であるが、第12図に示したような石鎌・石斧・スクレイパーもわずかに出土した。石鎌は基部と尖端を欠損している。石斧は打製のものが2点出土している。



No.	出土地點	長さ	幅	厚さ	種別	石質	年代
1	18T	(23.5)	11.5	5	石器	黑曜石	17
2	18T	30	23	7.5	スクレイパー・尖は石器	obsidian	-
3	18T 真土	48	43	11	スクレイパー	obsidian	-
4	19T	[16.5]	39.5	12	石器又は骨器	obsidian	-
5	18T 真土内	(27)	47.5	18	石斧	obsidian	-

第12図 石器実測図



第13図 弥生土器拓影図

②、弥生土器

出土した弥生土器のほとんどが掌大より小さな破片で、器形の明らかなものはない。第13図に示したとおり桥形開式・桜井式・天王山式が多いが、希に大泉式の破片も認められる。また、本調査においては第13図Na19に示したような櫛描状に縦走する五本沈線文の破片が発見された。これは、天王山式のものよりも新しい十王台式に併行する可能性を有するものと考えられる。

③、土師器

土師器も弥生土器と同様に小破片が多数出土した。器形のわかるものはない。第14図に示した土師器は、受部から脚部裏面へ貫通する孔はないが、塙釜式に属する器台と考えられる。他の特徴的な破片についても、塙釜式または南小泉式と観られるものである。

VII. まとめと考察

1. 今回の調査で、東西に二つの粘土構が発見されたが、墓壙に切り合いがないこと、共通の排水施設をもっていることなどから、両構は同時設置とわかった。

2. 木棺の本体は腐朽しているが、粘土等の痕跡から割竹形木棺と考えられる。

3. 埋葬施設の構築順序は以下のように観察される。

・墳丘積土を深さ1.3~1.4mに掘り墓壙とする。その際、作業通路となるものを墓壙東南部から前方部の方へ同時に施設する。^(注1)

・東西両構を設置する場所を更に舟形に掘り下げる。また、両構南端を結ぶように東西に排水溝を掘り、更に東構南端から通路中央部を通るように排水溝を南方へ掘る。その排水溝には礫石を入れる。

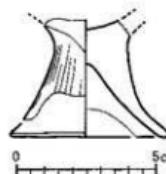
・舟形に掘り下げた部分に白色粘土を貼り、棺床をつくる。

・通路部に当たる排水溝の礫石の上には、褐色シルトを押め、また、墓壙内排水溝礫石上には白色シルトをかぶせて暗渠としている。^(注2)

・西構に割竹形木棺を据え置き、粘土を木棺のまわりに巻くようにして積み重ねる。その後、白色シルトで粘土のまわりを更に巻くように積み重ねる。これらは、特に木棺の側辺を補強するかのように、厚く積まれている。また白色シルト積み上げと同時に、構の南側と西側墓壙も、瓦層状に丁寧に埋めもどす。これが下部埋土である。

・東構も、構の構築は同様であるが、通路部分をこの時点ではまだ使用しているようで、構の東側を黒色と褐色のシルトで、丁寧に埋めもどす。これも下部埋土層である。

・両構間は、互層状の丁寧な埋めもどしとはなっていないが、褐色シルトで埋めもどし、東



第14図 18T墓壙埋土出土土師器

桿東側、西桿西側と同一面を形成し、西桿に寄せて礫石を置く。

・その後、木棺蓋部に薄く粘土を巻き、白色シルトをやはり薄くかぶせる。これも、東西両桿とも同様な手法で行なわれるが、手順としては西桿からである。

・通路部から両桿南側に当たる墓壇を一部埋めもどしてから、東棺蓋部には白色粘土、白色シルトを貼る。その時使用した白色粘土の残土は、壇土の一つとして、褐色シルト埋土の面に斜めに堆積している。これらは上部埋土層を形成する。

・粘土桿の仕上げが東桿まで終了した時点において、墓壇中央部、つまり粘土桿の上を褐色シルトで完全に埋めもどす。これも上部埋土である。

このように見てくると、構築工程の中で大きく異なる部分は、下部埋土上面までの方法と、その上の部分と、大きく見えることができる。下部は実に丁寧に築き上げてきているが、その上部は、いっせいに作業を進行させたという状況を呈している。また、下部埋土上面で、両桿間には、朱彩された礫石を含む礫石群があり、この時点に祭祀などの儀式が行なわれた可能性も考えられる。

4. 粘土桿は、東西に2基発見されたが、東桿のみに副葬品が発見された。伊東信雄氏等が、戦後の土取りの際に立ち会った時の所見によれば、「5~6mの舟形の粘土桿」ということにしておられ、一般的に粘土桿が7~8mであることから考えると、当古墳の粘土桿は、本来6~7mであったろうと推定される。

ところで、東桿の遺物の出土位置は、木棺南端から約2.3mほど北へ寄った位置周辺である。この位置は、割竹形木棺の長さを5~6mと推定すると、その中心よりは南側になる位置である。また、出土遺物が小玉、管玉、豎櫛であったということは、被葬者の頭部付近に副葬したものと考えて差しつかえないものであろう。このことより東桿は、頭位を南にして埋葬したものと考えられる。また西桿も、副葬品は発見されなかったが、東西両桿とも同時に施設されていることがわかるところから、東桿同様、南に頭を置いたものと思われる。

被葬者については、人骨の出土がないので断言できないが、豎櫛の多数の出土により東桿は推察できるかと思われる。古墳時代の人物埴輪の頭に櫛を表現した例がかなりあるが、みな女子であり、前額に1個の櫛をさしている。もちろん、櫛は女子のみ使用するものではないが、20個ほどの出土をみた東桿については、女性が埋葬された可能性が強いものと考えられる。

5. 当古墳の造営年代の検討にあたっては、副葬品として、その年代を直接的に示すものはなく、第1次~第5次までの周邊等調査の出土遺物などで、間接的なアプローチを試みなければならない。

・昭和53年度の調査での一括土器群で見ると、Ⅰ、Ⅱ土器群が塙釜式、Ⅳ、Ⅴ土器群が南小泉式（引田式）と考えられる。これは4世紀後葉~5世紀末の年代があたえられると

思われる。特に第Ⅰ、Ⅱ土器群の遺物は、その出土状況から、古墳造営の祭祀と密接な関係にあるのではないかと見られること。

・昭和51年度に土体部の残存状況を確認した際、粘土桿周辺から底部穿孔の朱塗りの土器片が若干発見され、古墳造営との関係が考えられたこと。これは底部破片であるが、塙釜式の土師器と見られること。

・古墳の形態、主体部の構造など、畿内型前期大型古墳の様相をしていること。これらは畿内においては4世紀に流行するものであること。東北地方において、主体部が粘土桿（割竹形木棺）とわかっているのは、福島県の会津大塚山古墳、保原町の高野古墳、山形県山形市の衛守塚2号墳、宮城県名取市の宇賀崎1号墳であり、4世紀後葉～5世紀中葉の年代が考えられること。^(註3)

・墓壙埋土からは弥生土器片が多数出土しているほか、塙釜式と思われる土師器片が少量出土していること。また仙台市では5世紀中～後葉にかけて窯業技術が導入されたことが大蓮寺窯跡の発見で知られており、古墳をとりまく南小泉遺跡からは同期の古式須恵器が発見されているが、墓壙内には須恵器片が1片も混入していないこと。

以上の諸要素から判断すると、当古墳の造営年代は、5世紀前葉と推察することができる。

6. 前方後円墳で粘土桿（割竹形木棺）の埋葬施設があるものは畿内型の前期大型古墳に多いが、この場合、鏡、剣、玉等の遺物が多量に副葬されているのが一般的である。現に、東北最古といわれる会津大塚山古墳からは、それらの多数の副葬品が発見されている。しかしながら、当古墳は粘土桿の北側半分以上が欠損しているとしても、副葬品としては、小玉4、管玉1、豎櫛20を数えるだけであったという現状である。

・辺11m以上の墓壙、2基の粘土桿、排水施設をそなえた埋葬施設、全長110cmの前方後円墳、幅広い周濠をもつ等の構造的要素は畿内型前期大型古墳の様相を呈しているが、副葬品の内容を見れば、在地型と言える。このことは、5世紀前葉は、当地方にも畿内の文化が到達していたが、大和政権下に組み込まれるなどを含めて、畿内との密接な交流がなく、地方色濃い、一つの分国としての地位を固持していたものと考えられる。

(註1) 本文中では「通路状造構」、「作業用通路」、「通路」という表現もとっている。また、これについては「排水施設」の文末でふれている。

(註2) 排水溝中の砾石をシルトで埋めもどすことによって、粘土桿構築作業を仕易くするためと思われる。

(註3) 福島県浪江町の本屋敷古墳群は56年～58年の計画で調査が進められているが、その第1号墳からも割竹形木棺が発見され、4世紀末に造営されたと考えられている。

主体部の規模（単位m）

墓 壇		確認面	底面
	南辺長	11.0	9.7
	西辺長	4.4+a	5.3+a
	東辺長	3.8+a	5.0+a
	北辺長	?	?
	深さ	西側 1.4	東側 1.1
	南北軸方向		N-8°-E
西 櫛	櫛長	3.5+a	棺長 2.6+a
	櫛幅	2.0	棺幅 0.9
	南北軸方向		N-16°30'-E
東 櫛	櫛長	4.0+a	棺長 3.35+a
	櫛幅	1.8	棺幅 1.15
	南北軸方向		N-9°30'-E
(主軸方向)			N-1°30'-W

引用・参考文献

- 佐野大和 「粘土構造」上代文化第19輯 1950
- 伊東信雄 「仙台市内の古代遺跡」仙台市史3 1950
- 「遠見塚古墳」宮城県文化財調査報告第1集 1950
- 末永・島田・森 「和泉黄金塚古墳」 1954
- 伊東信雄 「仙台市南小泉遠見塚古墳」日本考古学年報2 1954
- 氏家和典 「東北土師器の型式分類とその編年」歴史14 1957
- 伊東・伊藤 「会津大塚山古墳」会津若松市史別巻1 1964
- 伊藤玄三 「五世紀の古墳」古代の日本8 東北(角川書店) 1970
- 奥津春生 「大仙台園の地盤、地下水」(寅文堂) 1973
- 仙台市教育委員会 「仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第7集 1974
- 氏家和典 「東北における大型古墳の問題」東北の考古・歴史論集 1974
- 渡辺・結城 「仙台市大蓮寺古跡発掘調査報告」古跡研究会研究報告第4冊 1976
- 仙台市教育委員会 「史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報」仙台市文化財調査報告書第11集 1976
- 「史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報」仙台市文化財調査報告書第12集 1977
- 「南小泉遺跡一範囲確認調査報告書」仙台市文化財調査報告書第13集 1978
- 氏家和典 「東北における大型古墳の企画性と編年」東北歴史資料館研究紀要第4巻 1978
- 仙台市教育委員会 「史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報」仙台市文化財調査報告書第

- 15集 1979
- 仙台市教育委員会 「史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報」仙台市文化財調査報告書第20集 1980
- 宮城県教育委員会 「宇ヶ崎1号墳」宮城県文化財調査報告書第67集 1980
- 渡辺泰伸 「東北古墳時代須恵器の様相と編年」考古学雑誌第65巻第4分 1980
- 仙台市教育委員会 「史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報」仙台市文化財調査報告書第26集 1981
- * 「南小泉遺跡—都市計画街路建設工事関係第1次調査報告」
仙台市文化財調査報告書第35集 1982
- 石野博信 「古墳の出現」「古墳時代史」季刊考古学（雄山閣）創刊号 1982
- 東北歴史資料館 「東北の古墳」展示解説 1977
- 馬目順一 「入門講座・弥生土器—南東北1～5」 月刊考古学ジャーナル 1978・1979 (No. 148・151・154・156・159)

写 真 図 版

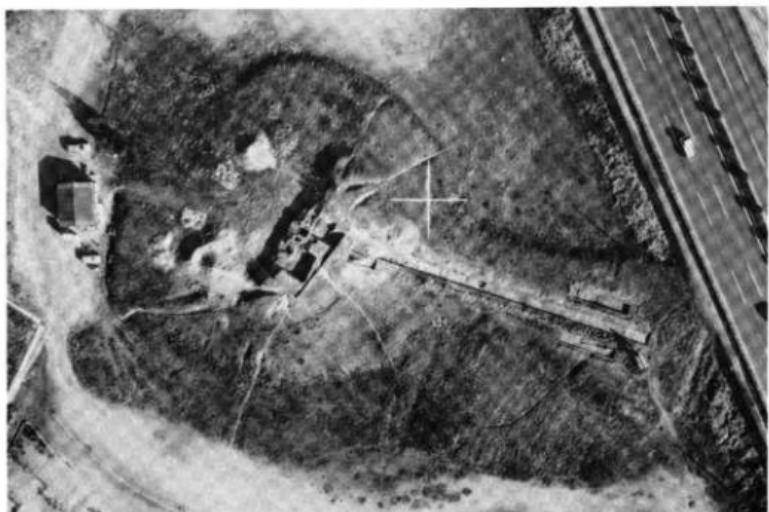


写真1 遠見塚古墳全景（左上が北）



写真2 18・19トレンチ北部全景（上が南）

写真3 主体部調査状況（上方）



写真4
墓壙検出状況
(東より)



写真5
両櫛検出状況及び
墓壙断面の状況
(北より)



写真6
墓壙断面
(東西ベルト南面)



写真7
東西両櫓棲出状況
—左東櫓—
(北より)



写真8
東 櫓
(北より)



写真9
東櫓内堆積土
横断面
(北より)



写真10
西 檻
(北より)



写真11
西櫻内堆積土
横断面
(北より)



写真12
東西両櫻間の
壁出土状況
(南西より)



写真13
墓壙～通路部の
堆積土及び排水
溝の状況
(東より)



写真14
東櫻東側外部の
堆積土の状況
(南より)



写真15
西櫻南側外面の
排水溝接続及び
堆積土の状況
(南西より)



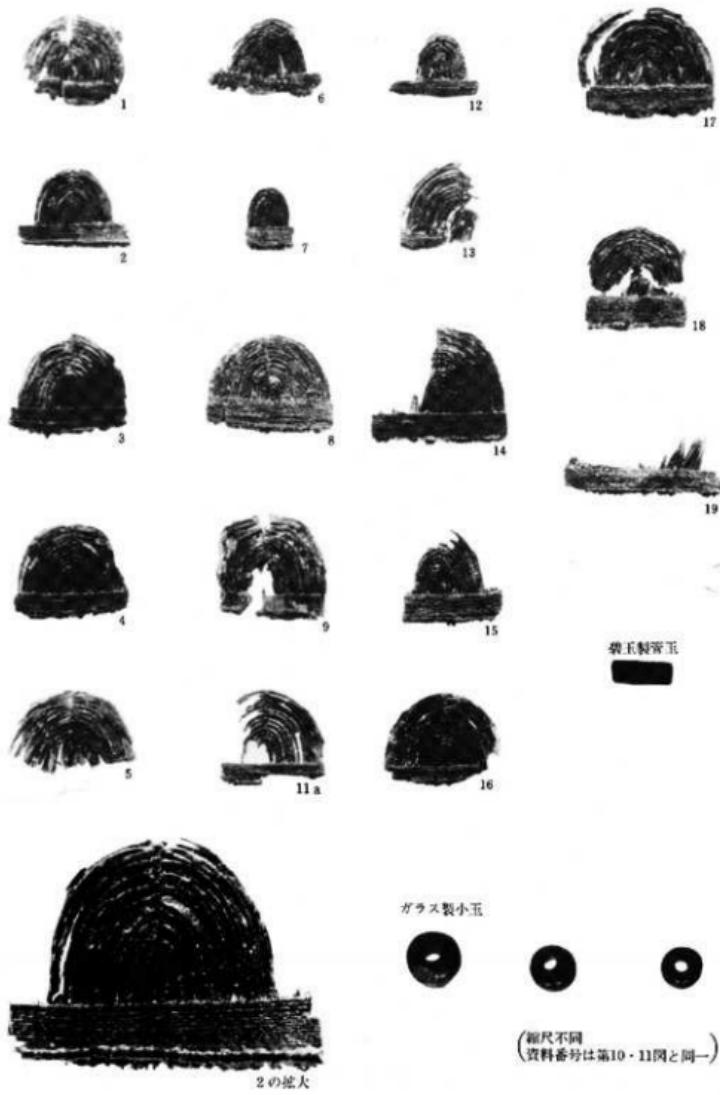
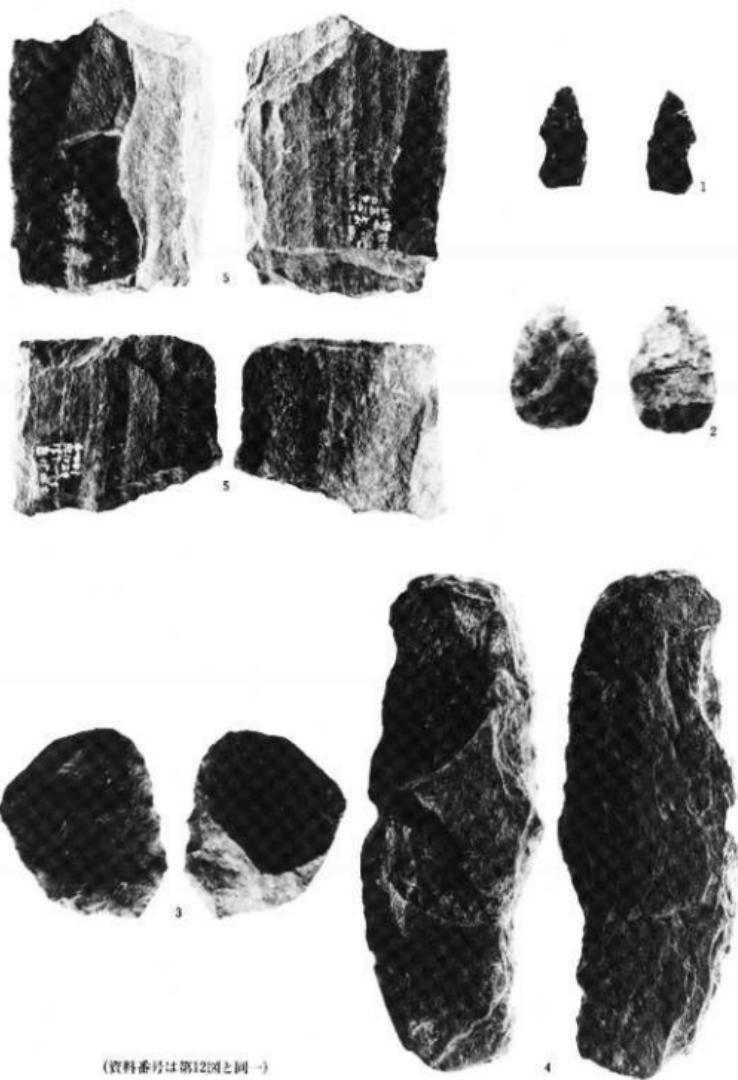
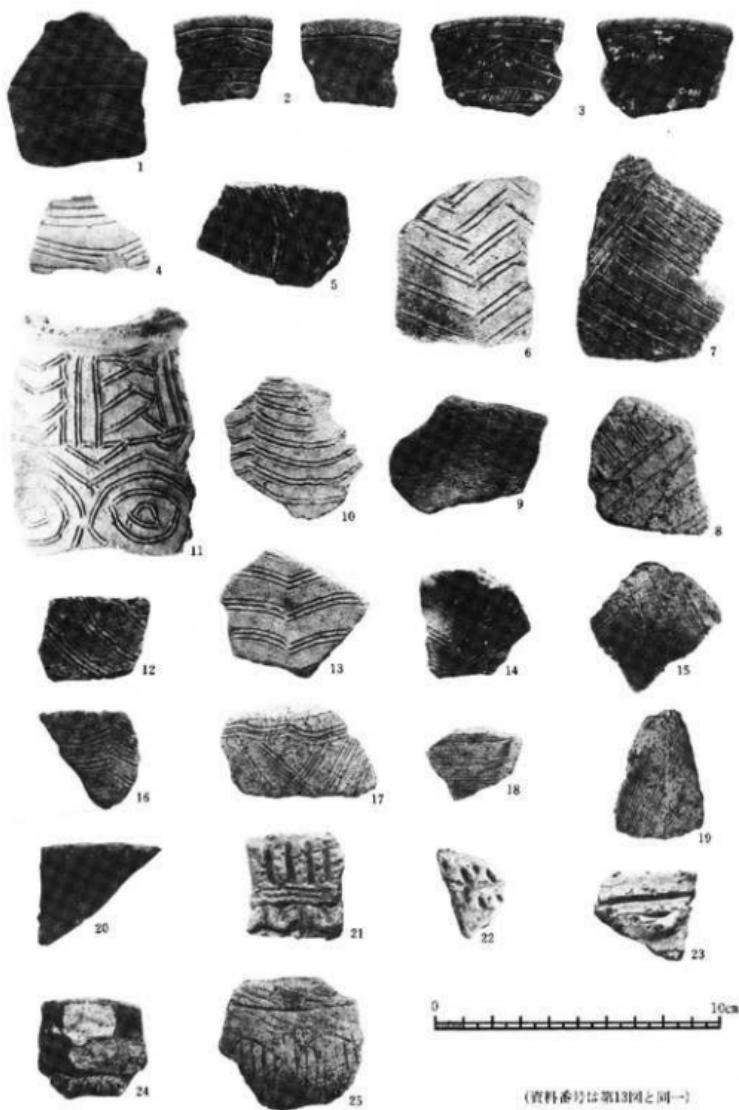


写真16 東柳出土 梨・玉



(資料番号は第12図と同一)

写真17 石 器



(資料番号は第13図と同一)

写真18 弥生土器

職 員 錄

社会教育課

課長 永野昌一
主幹 幸早坂春一

文化財管理係

係長 大沢隆夫
主任 事山口宏
・ 渡辺洋一

文化財調査係

係長(兼) 早坂春一
教諭 佐藤 隆
・ 渡辺忠彦
・ 佐藤 拓
・ 加藤正範
主任 事田中則和
・ 結城慎一
・ 成瀬茂
教諭 佐藤青沼一民
主任 事柳沢みどり
・ 木村浩二
・ 瑛原信彦
・ 佐藤洋
・ 金森安季
・ 佐藤川二
・ 吉岡恭平
・ 渡部弘美
・ 主浜光朗
・ 菅野裕淳
・ 長島栄一
・ 鶴井裕一
派遣職員 高橋勝也
嘱託 鈴木 実

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物雲煙下セコイヤ化石林調査報告書 (昭和39年4月)
 第2集 仙台城 (昭和42年3月)
 第3集 仙台市燕沢善光寺横穴古墳群調査報告書 (昭和43年3月)
 第4集 史跡園奥園分寺古墳群整備並びに調査報告書 (昭和44年3月)
 第5集 仙台市南小泉法輪院古墳調査報告書 (昭和47年6月)
 第6集 仙台市荒巻五本松墓跡発掘調査報告書 (昭和48年10月)
 第7集 仙台市宮原町吉塙発掘調査報告書 (昭和49年3月)
 第8集 仙台市白山愛宕山横穴群発掘調査報告書 (昭和49年5月)
 第9集 仙台市根岸町京極寺横穴群発掘調査報告書 (昭和51年3月)
 第10集 仙台市中田町久東通跡発掘調査概報 (昭和51年3月)
 第11集 史跡連見塚古墳群整備予備調査概報 (昭和51年3月)
 第12集 史跡連見塚古墳群環境整備第二次予備調査概報 (昭和52年3月)
 第13集 小泉遺跡一範囲確認調査報告書一 (昭和53年3月)
 第14集 史跡連見塚古墳群と53年度環境整備予備調査概報 (昭和54年3月)
 第15集 史跡連見塚古墳群と53年度環境整備予備調査概報 (昭和54年3月)
 第16集 六反田遺跡発掘調査 (第2・3次) のあらまし (昭和54年3月)
 第17集 北丘敷道跡 (昭和54年3月)
 第18集 桥江遺跡発掘調査報告書 (昭和55年3月)
 第19集 仙台市地下鉄関係分佈調査報告書 (昭和55年3月)
 第20集 史跡連見塚古墳群と54年度環境整備予備調査概報 (昭和55年3月)
 第21集 仙台市開闢関係遺跡調査報告1 (昭和55年3月)
 第22集 経ヶ峯 (昭和55年3月)
 第23集 年報1 (昭和55年3月)
 第24集 今泉城跡発掘調査報告書 (昭和55年8月)
 第25集 史跡連見塚古墳群と55年度環境整備予備調査概報 (昭和55年12月)
 第26集 史跡連見塚古墳群と55年度環境整備予備調査概報 (昭和56年3月)
 第27集 史跡園奥園分寺跡昭和55年度発掘調査概報 (昭和56年3月)
 第28集 年報2 (昭和56年3月)
 第29集 郡山遺跡I - 昭和55年度発掘調査概報一 (昭和56年3月)
 第30集 山手上ノ台遺跡発掘調査概報 (昭和56年3月)
 第31集 仙台市開闢関係遺跡調査報告II (昭和56年3月)
 第32集 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書 (昭和56年3月)
 第33集 山上遺跡発掘調査報告書 (昭和56年3月)
 第34集 六反田遺跡発掘調査報告書 (昭和56年12月)
 第35集 南小泉遺跡都市計画道路建設工事関係第1次調査報告 (昭和57年3月)
 第36集 北前道跡発掘調査報告書 (昭和57年3月)
 第37集 仙台平野の遺跡群I - 昭和56年度発掘調査報告書一 (昭和57年3月)
 第38集 郡山遺跡II - 昭和56年度発掘調査概報一 (昭和57年3月)
 第39集 燕沢遺跡発掘調査報告書 (昭和57年3月)
 第40集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報I (昭和57年3月)
 第41集 年報3 (昭和57年3月)
 第42集 郡山遺跡一地造成に伴う緊急発掘調査一 (昭和57年3月)
 第43集 鶴見跡 (昭和57年8月)
 第44集 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書 (昭和57年12月)
 第45集 府庭一茂庭住宅(地造成工事地内)遺跡発掘調査報告書 (昭和58年3月)
 第46集 郡山遺跡III - 昭和57年度発掘調査概報一 (昭和58年3月)
 第47集 仙台平野の遺跡群II - 昭和57年度発掘調査報告書一 (昭和58年3月)
 第48集 史跡連見塚古墳群と57年度環境整備予備調査概報 (昭和58年3月)

仙台市文化財調査報告書第48集
史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報

昭和58年3月
発行 仙台市教育委員会
仙台市国分町3-7-1
仙台市教育委員会社会教育課
印刷 (株) 東北プリント
仙台市立町24-24 TEL 63-1166
